

# 保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.8

新しくつくる  
～ 新型コロナウイルス  
感染予防の中での日常 ～



佐藤寛子



「保育をつなぐ」では、これまで学級担任、養護教諭、事務職員、隣接するいずみナーサリー保育士と、さまざまな立場から子どもとのつながり、子どもとかわる思いを綴ってきました。

第8回は世界中の人々の暮らしを大きく変えた新型コロナウイルスの流行、私たちの家庭、園や学校、会社等で起きたたくさんの変化や挑戦が、いまだ継続しているであろう時期にお届けします。

3密を避けるという、繰り返し求められる原則は、保育の世界で何より大切にしてきた「つながり」と相容れない、大きな矛盾を生みました。一方で、人と共にいる集団での暮らしの変化に際し、気づかされたこと、見えてきたことは、悲観することばかりではないという言葉も、多くの方が口にされています。今だからこそその思いを、記録に記憶に留めておきたい、そして、この出来事と向きあう中でも、保育者と子どもとの変わらないつながりが見えてくる、4歳児担任の思いが込められた記録です。

\*

佐藤寛子（さとうひろこ）  
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

## 始まり

2020年度の保育の始まりは、混乱と戸惑いでいっぱいだった。前年度の2月末より猛威を振るい始めた得体の知れないウイルスの影響で、日本中が見通しのもてない不安に苛まれ、保育現場もその渦に巻き込まれた。打ち出された「新しい生活様式」は、密集、密接を回避するものであり、かわりあって育ちあつていくことを大切に考えてきた保育のありようとは真逆とも思えるものだった。そして、同じように子どもが過ごす保育現場であるにもかかわらず、保育所は保育を継続することを求められ、幼稚園は休園を余儀なくされ、その対応が大きく異なることにも戸惑いを覚えた。

## 新しい生活

緊急事態宣言解除後の保育再開について、

不慣れなりモート会議も取り入れながら、園内で話し合いを重ねた。

時間差の始業式・入園式、学年ごとの時差登園やグループごとの分散登園の実施、公共の乗り物を利用してはいる家庭も安心して通園できるよう送迎方法を多様化、学年ごとに登降園口を変える工夫、水筒の使用……等々。

インターネットを利用した園だよりや園の様子のビデオ配信は、休園期間中から開始したが、保育再開後も継続することにした。降園後の消毒作業については、養護教諭を中心に念入りに打ち合わせを重ね、消毒を要する箇所や遊具、適した消毒液や洗剤など、事前に園内で共通理解を図った。

親子で手をつなぎ、歩いて通うことを大事にしてきた登降園の風景が、変わってしまう。年長児が花道を飾り、新入園児を遊戯室まで案内する例年の入園式はできなくなる。用務員さん手作りの、子どもたちが大好きな「幼稚園

園のお茶」もなくなってしまう。そんなさまざまな変更には戸惑いはあった。けれど、変えることに躊躇しなかったのは、おそらく、子どもたちが一日でも早く園に来られるようにと願う気持ちで、教職員皆が一致していたからであろう。

保育再開後は、変わったこと、変えることを理解し、柔軟に対応してくださる保護者の協力と、日々楽しみに登園し、一瞬一瞬を真剣に生きる子どもたちの存在が、何よりの原動力になった。

#### 4 歳児の「つくろ」

まだ梅雨が明けない6月半ばのことである。この日は、登園するとすぐに製作を始める子どもたちが多かった。空き箱を利用した車づくりだ。

5 歳児の間ではやり始めた車づくりが、4 歳児に広がってくるのは、あつという間だっ

た。「いいな！」と思うものをキャッチし、即自分たちの遊びに取り入れるのは、4 歳児の得意とするところだ。Aを含めた数人の子どもたちは、保育室の空き箱入れから、イメージにしっくりくる大きさの箱を見つけ出し、ストロー、竹ひご、ペットボトルのふた4個を手に握る。そして「早く、穴を開けて！」と口々に言い、ふたを私に差し出した。目打ちを使って器用に穴を開ける5 歳児と異なり、個人差はもちろんあるものの、4 歳児には目打ちの扱いも力加減もまだ難しい。子どもたちもそのことがわかっていて、穴開けは私に任せる。「早く！ 早く！」とせかす割には、私がふたに穴を開ける様子を、皆じつとよく見ている。怖いくらいの真剣なまなざしだ。よく見て、やり方を理解しようとし、できそうならばすぐにでもやってみよう、と思っている気持ちも伝わってくる。

4 歳児の物づくりは、忙しいけれど面白い。

「そんなに焦らなくても、ゆっくりやったらいいのに……」と思うが、とにかく形にしようと急ぐ。「自分でやりたい！つくりたい！」という気持ちが強いけれど、「できない……できないかもしれない……」と思う気持ちも同じくらい強い。あつちに揺れ、こつちに揺れながら、物との距離を縮め、つくる楽しさを感じ取っていく。その過程が興味深い。

ちよつとしたことで気持ちがなえて、やる気が失せてしまうことも多い。子どもたちのペースに合わせて手早く作業するが、物とかわる面白さは、一緒にじっくり味わいたいと思う。

## Aの車づくり



▲自分でやりたい（4歳児）

早々にタイヤを付け終わったAは、シンプ

ルな車体に、空き箱やストローをさらに取り付け始めた。材料棚にある折り紙やセロハンなどを、「これも使えそうだな……」とつぶやいては、セロハンテープで貼り付けていく。周りの子どもたちは、車体に色付けすると「できた！」と言って、走らせるほうに夢中になったが、Aは裝飾することが面白くなったようだ。「ここからミサイルが発射するんだ！」と車体の前部分に取り付けた2本のトイレットペーパーの芯から、赤いお花紙を引つ張り出す。Aのこだわりがどんどん形になっていくのは、見ていて気持ちがよかった。Aは、午前保育の大半の時間を車づくりに費やした。

## 壊す（分解）

「できた！見て！」と、Aは満足した様子で周りの友達や私に、出来上がった車を見せて来た。その出来栄えには、皆が驚いた。Aの車は、タイヤの付いた車体から上に伸び、



前後に広がったダイナミックな仕上がりがだった。「Aくん、すごいよー」と、一緒につくっていたBが感心したように言う。Aはうれしそうに笑い、車を大事に床に置くと、そっと走らせ始めた。(気に入ったものが出来てよかった)と思い、私はその場を離れた。

ところが、しばらくして戻ってみると、思ってもかけない事態になっていた。Aが怒ったようにつくった車を踏みつぶし、引きちぎって壊し始めている。周りの子どもたちも、驚いてその様子を見ている。「何が起こったの?」と、その場にいたフリーの教諭に目配せするが、「わからない……」と首を振る。保育室の状況や周りの子どもたちの様子から、誰かといざこざがあったようには思えない。(原因はAの中にありそうだと感じた。

とりあえず、一緒に壊すことにした。ただし、あれだけじっくりつくっていた物だから、踏みつぶし、引きちぎるような壊し方は私に

はできない。箱と箱をはがし分解した。無言で一緒に壊しながら、Aの気持ち徐徐に落ち着いてくるのが伝わってきた。同時に、何が起こったのか、なんとなくわかったような気がした。時間をかけ、工夫してつくり上げ、出来上がりに満足だったからこそ、壊すのにもエネルギーがいる。そうまでして、なぜ壊さないといけなかったのか。

おそらくAは、車を走らせてみて気づいたのだろう。あるいは、廊下に出て、5歳児がコースを走らせて遊んでいるのを見たのかもしれない。周りの子どもたちは、つくった車でいかに速く走らせるかを楽しんでたようにだった。



▲コースを走らせる (4歳児)

## つくり直す(再生)

昨年からAはよく物をつくった。ブロックを組み合わせてつくった銃や剣は、バランスが良く形がいいので、他の子どもたちがまねてつくり始めることが多かった。Aが積み木で乗り物や基地をつくると、周りの子どもたちは興味をもって集まってきた。あの頃、Aは自分の世界の中で、つくることを存分に楽しんでいった。今、周りの様子が見えてきて、友達とかかわる楽しさを知り始め、Aの世界が広がってきたことを感じる。

この日、Aは壊した箱とタイヤでシンプルだけれどスピードが出る新しい車をつくり直した。降園時間が近づき、片付けになってもつくり続けるAに文句を言う人は誰もいなかった。最後までしっかりとつくり上げることを保障したいと思う私の気持ちが伝わったのか、Aの気持ちがわかるのか、周りの子どもたち

はいつも以上に張り切って片付けてくれた。

## 新つくり直し

「今」を真剣に生きる子どもたちからは、学ぶことが多い。

変えることと、変えてはならないこととを見極めつつ、今まで大切だと信じてきたことも見つめ直し、時には壊してみることも必要なのかもしれない。壊して新しくつくり直してみることで、本当に大切にしたいことは何であるのか、あらためて気づくことができるように思う。

世界中が、今もなお、見通しのもてない状況にあるが、園に子どもたちの時間がしっかりと流れていれば、物とかかわり、人とつながる豊かな幼児期の暮らしは変わらずに守られていくはずだ。「新しい生活」は与えられるものではなく、子どもたちと私たちとでつくっていくものだろう。